

台日女子大生による初対面会話の対照分析

——初対面会話フレームの提案を目指して——

張 瑜 珊*

A Contrastive Study of Initial Interactions between Taiwanese and Japanese Female University Students :

A Proposal on the Frame of First Conversations

CHANG Yusan

abstract

Based on my experiences, there seems to be a subtle difference in interactions between Taiwanese and Japanese during initial conversations. As such, this paper attempts to investigate and make sense of the reasons behind such differences. Using the frame analysis approach, I analyzed 10 Chinese conversations and 9 Japanese conversations, which have been both by female university students and recorded in experimental settings. The result indicated that Japanese tend to use fixed patterns during conversations openings whereas Taiwanese adopt a free format. In addition, the reserach also concludes that during initial conversations, Taiwanese tend to require personal background information of the interlocutors' within the short time, and the categories differ from what the Japanese prefer. Based on the two findings, this study will attempt to propose a framework of initial conversations between Taiwanese and Japanese.

Keywords : initial conversations, frame of the initial conversation, openings of the conversation, information of personal background, interpersonal relations

1. はじめに

来日する留学生数は近年増加する一方である。出身地域別（2005年度）に見ると、中国、韓国及び台湾からの留学生が全体の83%を占めている¹。日本人学生にとってアジアからの留学生との接触機会は確実に増えていると思われる。しかし、アジア系留学生と日本人学生の接触場面において、留学生は、お互いに親しくなりにくいことを日本人学生よりも強く意識していることが指摘されている（横田,1991）。

友人関係を構築できるか否かは初対面である程度決まり（Berg & Clark,1986）、また、初対面会話の相手や相互の会話に対して好印象を抱くと、相手との将来の関係に対しても肯定的な認知を形成する（小川,2000）という。従って、留学生と日本人学生の親密な関係構築にとって、初対面会話は重要な役割を果たすことが考えられる。筆者は自身の日本人との初対面会話において、相手に対して親しさを感じにくく違和感をもったという経験があ

キーワード：初対面会話、初対面会話フレーム、開始部、身上的情報、対人関係

*平成17年度生 国際日本学専攻

る。この違和感はどこから来ているのかを探りたいと思ったのが本研究の動機である。この違和感を説明するものとして本研究ではフレームに注目することにした。以下、フレームについて説明する。

フレームとは、Tannen (1993) によれば、人、物、イベント、状況、相互行為の仕方などについての期待の構造化されたものと定義されている（下線は筆者）。ひとは成長する過程で、言語と共に様々な言語行動のフレームを学ぶと言われ、成人であればそれぞれの出身文化フレームを持っている（陳, 2002）。ストーリーテリングフレーム、討論フレームなど様々なフレームが既に提起されており（Tannen, 1993, Watanabe, 1993, 陳, 2002）、初対面会話についても、それを他の言語行動から区別する初対面会話フレームがあると考えられるだろう。また、接触場面におけるグループ討論をフレームの観点から探った陳（2006）によると、接触場面で構築されるフレームは使用言語のフレームの影響が強いという。以上から、接触場面で交わされる初対面会話は、実はそれぞれの母語フレームと使用言語（日本語）の複雑な絡み合いの下で、参加者が共に構築していると推定できる。従って、筆者が感じた違和感も、お互いが持つフレーム上の差異や使用言語との影響関係によって生じた現象であると考えられる。

初対面会話については、日本語、中国語何れの母語フレームも管見の限りまだ解明されていない。従って接触場面の初対面会話のフレームを扱う前提として、まずは、それぞれの母語フレームの解明が必要であろう。その上になって、例えば台湾人留学生はどのような自文化の初対面会話フレームを持って接触場面に臨んだのかを探るという手順をふみ、そこから、接触場面における筆者の感じた違和感の説明がなされようとする。

そこで、本研究では、女子大学生を対象とし、台湾の中国語母語話者と日本の日本語母語話者それぞれの母語場面の初対面会話に焦点をあて、両言語の母語場面の初対面会話フレームを明らかにすることを目指す。

2. 先行研究

グループ討論のフレームについては日米、台日の対照研究が多くなされている（Watanabe, 1993, 陳, 2002, 2006）が、初対面会話のフレーム分析は未だない。そこで、初対面会話のフレーム分析を試みるに当たって、本研究では、先行研究として、グループ討論のフレーム分析と初対面会話の談話分析の研究を取り上げる。

2-1. グループ討論のフレーム分析

陳（2002）は台日のグループ討論の母語フレームを明らかにするために、台日各々の母語場面における4人によるグループ討論場面を実験的に設定してその音声資料を収集し、それを文字起こしして得られたデータに対して、①討論がどのように始められ、②どのように終結されたかに加えて、③「テーマ間の移行」④「ポーズ」⑤「発言順番と進行役」⑥「トピックの転換」の六つの観点から分析を行った。結果、これら六つの点において、両言語では異なる参加の仕方がなされており、それぞれ異なるフレームでグループ討論に関わっていることが分かったとして、台日のグループ討論の母語フレームをこれら六つの点から構成されると報告している。開始部と終結部の詳細について陳は両者の違いを以下のようにまとめている（陳 2002）。

「開始の仕方」：実験者の最後の発話（「それでは、（討論を）お願いします」）が発されたあと、何も挟まないか、あるいは短いポーズを挟むだけで直ちに討論に入る台湾グループと、発話の順番や司会役を決定した後で討論に入る日本グループ。

「終結の仕方」：参加者が一人で討論の終了を宣言し終結することが多い台湾グループと、司会が討論の終了を提案し、それを受けて参加者が同意を表明することではじめて討論が終結する日本グループ。

初対面会話の開始部や終結部においてもこうした傾向は観察されるのであろうか。本研究では、初対面会話の台日の母語フレームを明らかにするに当たって、次に初対面会話がどのように開始されるかに絞って見ていくことにする²。

2-2. 初対面会話の談話分析

Maynard & Zimmerman³ (1984) は、友人同士と初対面同士の会話の違いを探るために、実験的にそれぞれの会話場面を設定して、英語母語話者を対象に調査を行った。結果、友人同士と初対面同士では、話題（topical

talk) の展開装置 (device) に違いがあることが分かったとしている (表1 参照)。

【表1 友人同士と初対面同士における話題展開装置の種類の違い】

関係	異なる話題展開装置の種類	
友人 同士	過去の経験 (第三者のこと、会話の相手に知らないニュースなど)	
初対面 同士	質問・答えの 連鎖	カテゴリー化の連鎖 (categorization sequence) (学年、専攻、など一般的の身分についての質問)
		カテゴリー活動の連鎖 (category-activity sequence) (カテゴリーに関する活動についての質問)

*表の作成は筆者

カテゴリー化の連鎖とは、「学年は？」や「どんな専攻ですか？」など、相手をカテゴリー化するための質問と答えの連鎖を指す。他方、カテゴリー活動の連鎖とは、既に取り上げられたカテゴリーについて、そのカテゴリーに付随する活動についての質問を指す。例えば、専攻というカテゴリーに続いて、「どんな授業を取っていますか？」や「誰々先生知っていますか？」などを指す。初対面の談話は、とり上げられる話題と言う点から、カテゴリー化の連鎖とカテゴリー活動の連鎖として特徴付けられると言える。

女子大学生による初対面会話の韓日対照研究として奥山 (2000) がある。40 分の初対面会話を調べた奥山は、韓日両方とも会話開始後5分間の間に相手に自己開示⁴を求める質問をしたり、自ら自己開示をしたりしていることを指摘している。奥山は、先述した両方法から転換される話題を、属性に関する話題、属性から派生する話題、そして非属性の話題の3種類に分けている。属性に関する話題とは、「年齢、学年、居住地域、専攻などの大学生としての一人の人間に付帯する基本的な指標に関する話題」のことである。属性に派生する話題とは、「属性の話題が出た後でそれに派生して出てくる話題、例えば居住地から現在地まで来た方法や所属学部 of 男女比などの話題」である。非属性の話題とは「属性および属性に派生する話題ではないもの、すなわち、ボーイフレンドやアルバイト、就職に関するいわゆる私的な話題など」である (奥山, 2000:125)。奥山の「属性に関する話題」は Maynard らの「カテゴリー化の連鎖」に、奥山の「属性から派生する話題」は Maynard らの「カテゴリー活動の連鎖」に相当すると見ることができよう。奥山の研究結果をまとめると、質問による属性に関する話題は韓日の相違が見られなかったが、自己開示で起こる属性に関する話題の方は韓国が日本より2倍弱多かった。但し、属性に関する話題の相違は疑問文の形式に注目され、自己開示の話題は自己開示内容の属性 (中間的・否定的、肯定的など) に関する結果である。

また謝 (2005) でも初対面会話の最初の5分間に注目して中日女子大生の初対面会話の対照分析がなされている。中日両グループとも、最初の5分間には、「身上的情報」の話題がそれ以外の話題を上回って取り上げられる傾向が見られたとしている。ここでいう身上的情報の話題とは、会話参加者の名前、所属、研究テーマ、そして住まいなどに関するものを指し (謝 2005: 297)、Maynard らの「カテゴリー化の連鎖」、奥山の「属性に関する話題」などに相当するものである。但し、謝 (2005) では中日の身上的情報の話題の相違について詳細に探求されていない。

以上、初対面会話の談話研究から、初対面会話においては、開始後5分間の間に相手をカテゴリー化するための身上的情報のやりとりが多いことが分かった。中国人の人間関係は、既定関係 (個人が所属する社会関係からのもの、例えば血縁関係、地縁関係) と交際関係 (自己と他人との交流から構築される) から成り立つとされている (彭、楊, 2001)。初対面会話では、まず既定関係の構築が重視され、それを前提にして、交流が深まるに伴い、交際関係が構築されていくと考えられる。しかしながら、以上の先行研究ではどのような身上的情報 (奥山では属性、Maynard らではカテゴリー化の連鎖) がやり取りされるか、その内容の点から文化グループ間の異同を探ることはなされていない。

3. 研究課題

会話開始からの5分の間に身上的情報の交換が一番活発であるという知見（奥山 2000；謝 2005）を踏まえ、本研究でも開始後5分間を分析対象とする。従って、本研究では初対面会話フレームを考えるにあたり、初対面会話をどう開始するかに加え、身上的情報の内容もあわせて検討する。

そこで、台湾と日本の女子大学生の初対面会話のフレームを提案するため、本研究では以下のように研究課題を設定した。

台湾と日本の女子大生同士の初対面会話において、

- (1) 初対面会話の開始部の切り出し方法に違いがあるか。
- (2) 相手に求める身上的情報には内容上に違いがあるか。

本研究では会話の開始の5分間を研究対象にし、終結部に関してはここでは取り上げないことにする。

4. 研究方法

4-1. 調査方法

データの収集のプロセスを順番に紹介していく。

(1) 協力者募集

「人と人との間でどのようにコミュニケーションをするか」を調査する目的で、日本の某国立大学の女子学部生 20 名と台湾の某私立大学の女子学部生 20 名、それぞれ 10 ペアの協力者を募集した。学習効果を防ぐため、協力者全員に一回のみの協力を求めた。

(2) ペアの組み合わせ

協力者の専攻、学年、応募ルートなどを考慮した上、ペア内の上下関係が一致させるため学年に2年以上の間隔が空かないよう努めながら、初対面ペアの組み合わせ作業を筆者自らが行った⁵。次に、協力者に最低限の情報を与え、日常の初対面場面にできるだけ近づけるために、協力者には、調査者と個別に約束した上で、キャンパス内の教室に来てもらうことにした。

(3) 実験調査

実験調査には二つのセッションが含まれている。

①「20 分 + α 分」の自由会話

初対面場面を設定しただけで、協力者に対して特に課題は与えなかった。時間は 20 分として設定したがペアによって終了時間には多少幅があった。

②会話の感想とフェイスシートの記入

初対面会話の終了後すぐ、会話の感想とフェイスシートが含まれているアンケートの記入を求めた。アンケートは日本語版と中国語版を作成、使用した。

(4) 文字おこしとそのネイティブチェック

録音、録画データを参照しながら 20 分 + α 分の会話を調査者が文字化作業を行った。日本語データに関しては、音声データと照らし合わせながらのネイティブチェックを日本語母語話者に依頼した。

文字化ルールは好井ら（1999）、岩田（2004）に記載されている「トランスクリプトで用いられている記号」を参考に、修正・作成した⁶。

4-2. 分析方法

まず、会話データを話題で区切る。本研究における「話題」の定義は、三牧（1999）の「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念を話題とする」に従うこととする。さらに、話題は会話の参加者が相互に作り上げるものであるため、話題とは、会話者の一方が話題先行連鎖（pre-topical sequences）（Maynard ら, 1984）を提案してから、もう一方がその概念を受け入れ、その概念からの派生的連鎖を後続的に発する、その塊を指す。すなわち、話題は話題先行連鎖からなるものである。

但し、話題先行連鎖の提案は必ず相手に受け入れられるのではなく、例えば、会話例(1)のように、発話 60～61 では共通した概念についての後続連鎖がないものもある。分析単位を統一するため、このようなものは話題先行連鎖の話題と見なすことにする。

会話例(1)

- | | | | | |
|----|--------------------|--------------------|---|-----------|
| 60 | T02L1 ⁷ | 嘿, 你是台北人嗎? | } | 話題先行連鎖の話題 |
| | | (えっ、あなたは台北の人ですか) | | |
| 61 | T02Z1 | 不是, 我是花蓮人. | | |
| | | (いいえ、私は花蓮(地名)の人です) | | |
| 62 | T02L1 | 那你有跑營隊嗎? | | |
| | | (じゃ、協力隊に入っていますか) | | |

1) 会話の開始部の切り出し方法について

初対面会話をどう開始するかを見るために、すべての初対面会話の最初の切り出しの言語行動を比べ、台湾と日本の異同を比較する。

2) 会話参加者の身上的情報について

Maynard ら (1984) では、カテゴリー化の連鎖は質問・答えの連鎖から開始すると述べている。言い換えれば、身上的情報のやり取りは主に質問・答えという連鎖方法から始まるという。例えば、会話例(2)のようである。

会話例(2)

- | | | |
|---|-------|---|
| 2 | J05H1 | えっと、なん、留学生ですか？ |
| 3 | J05I2 | は？ |
| 4 | J05H1 | と、日本？あつ普通に。 |
| 5 | J05I2 | 普通に、[日本ですよ。 |
| 6 | J05H1 | [日本です。あつ、私もそうなんですけど。えっ、なんか、なんか台湾の方と、(.)の比較、会話の比較のみたいなのをやるのかなって。 |

……………以下は省略

但し、奥山 (2000) によると、自らから自己紹介のところで自分の身分を紹介する場合がある。

会話例(3)

- | | | |
|----|-------|----------------------------|
| 7 | J10U3 | あつ、私は【苗字1 + 名前1】です。 |
| 8 | J10K1 | はい。 |
| 9 | J10U3 | あのう、中文の三年です。 |
| 10 | J10K1 | えっと、【苗字2 + 名前2】です。 |
| 11 | J10U3 | [° 【名前2】 ちゃん°。 |
| 12 | J10K1 | [生活の一年です。 |
| 13 | J10U3 | あつ、生活の、えっ、あのう、文系？ |
| 14 | J10K1 | 文系です。 |
| 15 | J10U3 | [あつ、文系です。 |
| 16 | J10K1 | [人間生活学科、生活社会科学コースです。[長いです。 |

会話例(3)では、Uさんは自発的に、自分の名前、所属と学年を会話の相手Kさんに示してから、Kさんも互酬(reciprocity)的に自分の身上的情報を公開する。その後、二人は自己紹介で得たカテゴリーの情報から会話を展開していった。つまり、身上的情報のやり取りは質問・答えの連鎖だけではなく、自ら言い出し相手の互酬性を求める連鎖もある。

そこで、話題が話題先行連鎖の受け入れという概念から、分節された話題と話題先行連鎖の話題の中の話題先行連鎖を両方法による身上的情報交換のやり取りから見られるかどうかを判別する。そして、それらの身上的情報を意味するカテゴリーを命名する。例えば、先述した会話例(2)でのカテゴリーは国籍とする。ただし、会話例(3)のような自己紹介というまとまった話題には、名前、学科、学年と複数のカテゴリーが存在することになり、それぞれを数えることにする。

以上の分析を経て、最後に台湾と日本のカテゴリーの種類をまとめて比較する。

4.3. 分析対象

本研究の分析対象としたのは収集したデータの中の台湾の10組と日本の9組である⁸。

5. 分析の結果

会話の開始部と身上的情報について、それぞれの異同を順番に説明していく。

5.1. 会話の開始部

台湾グループと日本グループは以下のような言語行動で話を切り出した。

【表2 台湾と日本の切り出しの言語行動】

会話を切り出す言語行動	台湾	日本
① 定型的なあいさつ言葉 (こんにちは、初めましてなど)	0%	67%
② 状況に誘発された言葉 (現在の気持ちや、来た理由など)	60%	33%
③ 自己紹介をし始める (開始の確認や、すぐ自己紹介に入る)	40%	0%

定型的なあいさつ言葉とは、奥津・沼田(1985)で示された「初めまして、どうぞよろしくお願いします」や、出会いの一般的なもの「おはよう(ございます)」「こんにちは」「こんばんは」などである(会話例4)。

会話例(4) 日本側：定型的なあいさつ言葉

- 1 J05I2 初め[まして、よろしくお願いします。
- 2 J05H1 [初めてして、よろしくお願いします。° えっと、なん、留学生ですか° ?
- 3 J05I2 は?

表2から分かるように、定型的なあいさつ言葉を交わしたのが、日本グループは67%である一方、台湾グループでは一ペアも観察されなかった。

状況に誘発された発話とは、実験に対する協力者が相手と対面しているという現在の自分の気まずい気持ちや考えを表すものや、実験にきた訳、実験の時間についてのものである(会話例5、6)。この割合をみると、日本グループは33%で、台湾グループは60%であった。

会話例(5) 台湾側：状況に誘発された発話

- 1 T07Z1 好尷尬哦。(気まずいですね)
- 2 T07L1 是阿。(そうですね)
- 3 T07Z1 現在該怎麼辦?(今はどうすればいいですか)

会話例(6) 日本側：状況に誘発された発話

- 1 J06T1 もう：：：、初対面ですね。
 2 J06O2 そうですね。
 3 J06T1 緊張しますよね。じゃ、まずちょっと自己紹介を。
 4 J06O2 あっ。

最後に、切り出す言葉を特に発することなく、すぐ自己紹介を始めるという行為、或は開始のサインをいれただけで自己紹介に進んだものが台湾グループでは全体の4割において観察された（会話例7）。しかし、日本側にはこのような行為は全く見られなかった。

会話例(7) 台湾側：開始の確認だけで自己紹介を入れる

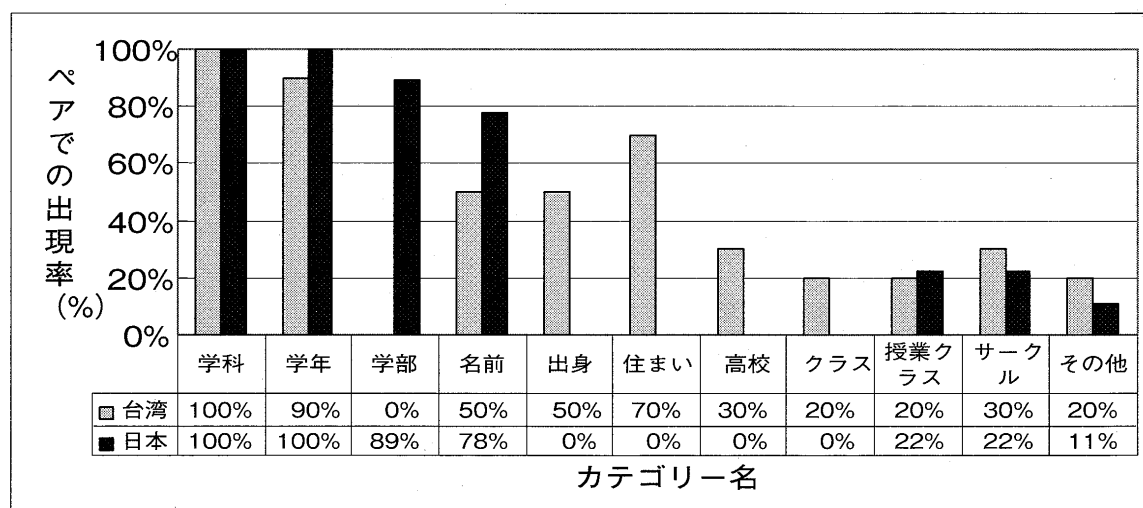
- 1 T10Z1 那我們就開始吧。（じゃ、始めましょう）
 2 T10C1 你是什麼系的？（何学科ですか）
 3 T10Z1 我是歷史系。（歴史学科です）

5-2. 会話参加者の身上的情報について

日本グループと台湾グループの話題先行連鎖の身上的情報のやり取りを抽出した結果は表3と図1に表す。表3では、分母は分析対象としたペアの数を意味する。分子は抽出されたカテゴリーが各グループで出現したかどうかの実数を意味する。図1はそれらの数をパーセント化にしてグラフにしたものである。

【表3 カテゴリー化の連鎖から見た台・日の差】

	学科	学年	学部	名前	出身	住まい	高校	クラス	授業 クラス	サークル	その他
台湾	10 /10	9 /10	0 /10	5 /10	5 /10	7 /10	3 /10	2 /10	2 /10	3 /10	2 /10
日本	9 /9	9 /9	8 /9	7 /9	0 /9	0 /9	0 /9	0 /9	2 /9	2 /9	1 /9



【図1 カテゴリー化の連鎖から見た台湾・日本の差異】

その他の項目は、台湾では、年齢と原住民であるかどうかというカテゴリーである。それぞれは一回の出現である。日本のその他の項目は会話例(2)で示した国籍確認のカテゴリーである。それも一組だけに観察されたカテ

ゴリーである。

その他の項目を除いて、表3と図1から、台湾グループでは、学科、学年、名前、出身、住まい、高校、クラス、授業クラス、サークル、全部で9つのカテゴリーが見られた。一方、日本グループのカテゴリーは、学科、学年、学部、名前、授業クラス、サークルと合計6つあった。

両グループの出現の有無を比較してみると、台湾では学部に関するカテゴリーが観察されなかったのに対して、日本では出身、住まい、高校とクラスの各カテゴリーが観察されなかった。

両グループに共通しているカテゴリーに関して、名前をめぐっては28%の差（台湾50%、日本78%）があるのに対して、残りの学科、学年、授業クラス、サークルでは大きな相違がなかった。

以上、5-1と5-2の分析結果を表4にまとめる。

【表4 台湾・日本の初対面会話フレームの異同】

	初対面会話の開始部	会話参加者が必要とする身上的情報
類似点	台・日とも状況に誘発される発話が見られた。	1. 台・日ともに学科、学年、名前の情報が必ず必要。 2. 授業クラス、サークルの情報必要度が低い。
相違点	<p><日本> 定型的なあいさつ言葉が多い。</p> <p><台湾> 1. 状況に誘発される発話がより多い。 2. 特別の切り出しなしに自己紹介を開始する場合もある。</p>	<p><日本> 名前についての情報をより重視。</p> <p><台湾> 出身、住まい、高校、クラスの身上的情報がこの時間帯で出てくる。</p>

6. 考察

初対面会話フレームを考えるに当たって、初対面会話を枠付ける「初対面会話の開始部」に加えて、初対面同士の会話を友人同士の会話から区別する「会話参加者の身上的情報の交換の部分」に注目して分析を行った。以上の結果を踏まえ総合的に考察する。

最初に、それらの談話の共通点を先述した会話例の(4)(5)(6)から考察してみる。定型的なあいさつ言葉、及び状況に誘発された発話の両者にて、会話の参加者は初対面会話のフレームを開始する時に、互いに同じ『場』にいることを確認しあうことが分かった。会話例(4)は「初めまして」と一方が言えば、同様に言葉を返してきた。会話例(5)と(6)では、会話を切り出した話者に対して、もう一人の参加者は「そうです」という同意の言葉で対応した。「そうではない」という返答は考えられないだろう。そして、「ね」と「よね」の使用によって、両者は一定の距離に縮まったと想像できる。まとめると、初対面会話のフレームの開始には、会話の参加者達は一瞬の共通感覚を確認しあう連鎖から会話を展開していくと考えられる。但し、言語文化によって、台湾と日本は異なる言語行動を取っている。

次に、相違点については以下のように考察する。

(1) 開始部において定型表現が優先される日本フレーム

本研究で取り上げた開始部は、陳（2002）が述べた台日のグループ討論フレームの「討論の開始」と共通する現象が見られた。

陳（2002）によると、日本グループは、まず司会、発言順番、取り上げる話題の順番などの討論の形式に関わることを全体で決めてから、討論が開始される。他方、台湾グループでは、そうした討論の形式についての議論はなされず、直ちに討論そのものに入る。つまり、グループ討論のフレームを考えたとき、日本フレームは討論の形式を整えることから開始されるのに対し、台湾フレームは討論形式ではなく、実質的な討論に入ることによって開始されるという違いがあることを指摘している。

この知見を本研究の開始部と対照してみると、本研究の日本グループでは、より定型的なあいさつ言葉を交わ

すことで初対面会話が開始されるのに対し、台湾グループでは置かれた状況に対する率直な気持ちを互いに言い合うことで開始されるという点で、開始の仕方においてグループ討論との間に共通点が見られることが分かる。言い換えれば、初対面会話の日本フレームは形式重視、台湾フレームは内容重視と特長づけることができるであろう。このような形式が重視され定式化された声が発せられることで、参加者個人の声が前面にでてきにくい日本フレームによる初対面会話は、開始部に限られるとは言え、それに参加する台湾人にとっては、人情の暖かさが感じられにくいものといえるかもしれない。

(2) 短時間の内に相手の身上的情報を必要とする台湾フレーム

5分間という短い時間に台湾と日本で交換された身上的情報の内訳では「その他」の項目を除いて台湾は9項目で日本は6項目である。両グループが5項目において（学科、学年、名前、授業クラスと、サークル）共通している。台湾だけに見られたカテゴリーは出身、住まい、高校、クラスであるのに対して、日本だけに見られたものは学部というカテゴリーである。

出身、住まいのカテゴリーと学部の対照は、バーンランド（1975）が主張した「私的自己」と「公的自己」の対立概念から解釈できると考える。出身、住まいの話は学部よりは私的自己の範囲に入るものと考えられるからである。こうしたやや私的自己の範疇に入るものについては、台湾は短期間のうちにやり取りの内容として取り上げるが、日本ではそうではないことがわかった。つまり、初対面会話の冒頭の短時間の間に、台湾グループでは日本グループよりも、会話の相手に関する多くの種類の身上的情報が必要であり、さらに、日本グループより、短時間のうちに他人の私的自己が取り上げられる。このことから、台湾の対人的距離は日本より短いと考えられる。従って、台湾人は日本人との初対面会話を臨むとき、母語フレームに比べて、日本語フレームは対人的距離が長く、そこから日本人と親しくなっていくという感覚をもつことが予想される。一方、日本人は、台湾人が行う短時間での私的自己領域の情報収集行動に関して、攻められているという感覚を持つと推測されよう。

学部のカテゴリーがなぜ台湾グループには出現しなかったのか、その現象を考察すると、中根（1967）が主張した日本のタテ社会に関連すると考えられる。日本の人間関係は所属団体に決められている。従って、学科だけではなく、学部の提示も自然に出てくるのではないと思われる。反対に、台湾の方は血縁、地縁などの要素から人間関係を形成していると言われている（楊, 2001）。これは台湾グループの出現したカテゴリーの中から50%の比率で台湾人女子大生が相互の出身を聞いたことから証明できる。初対面場面で向かい合う相手をどのように認識していくかについて、日本側はより所属から築いていき、台湾側はより地縁から関係を組み立てると言えよう。

7. 終わりに

本研究は、台湾人である筆者が、日本人との初対面会話で感じた物足りなさ・不満足さを出発点として、人と人が初めて出会う際の印象形成に大きい影響を及ぼすとされる初対面会話の冒頭の部分を取り上げ、対照分析を行った。グローバル化時代の文化背景を異にする人々同士の間でなされるコミュニケーションを考えると、Tannenが提起したフレーム分析を援用し、多くの言語の多くの言語行動についてフレームを探っていくことが重要であると考え。本研究においてもそうしたことを踏まえ、台日のグループ討論フレームを提案した陳（2002, 2006）に続き、台湾と日本の初対面会話のフレーム分析の第一歩として、台湾と日本の女子大生を対象に試みた。

分析と考察の結果を整理すると、台湾と日本の初対面会話フレームは以下のように考えられる（表5）。

【表5 台湾・日本の初対面会話フレーム】

日本の初対面会話フレーム	台湾の初対面会話フレーム
1. 開始部： より形式重視	1. 開始部： より内容重視
2. 5分間内の身上的情報収集： 公的自己に留まる	2. 5分間内の身上的情報収集： より私的自己に入る

今回の結果からある程度台湾人と日本人との接触場面で起こる食い違いの原因を示唆できたと考える。言語学習者にとっては、目標言語のフレームを真似しそれに合わせることを追求するのではなく、コミュニケーション教育の一環として、自分の母語と目標言語の間にある言語だけでなくフレームの違いを知り、その上でそうした違いを踏まえて新たなフレームを共に作り上げていくことが望まれる。初対面会話について言うなら、相互の異同を知っておけば、初対面会話での落胆を防ぐことができるであろう。そして、そのことで、次のさらなる交流に繋がることが期待される。

8. 今後の課題

今回は初対面会話の冒頭を中心に分析したため、全貌はまだ明らかになっていない。つまり、初対面会話フレームの構築という課題のごく一部しか達成できていない。それを今後の課題としたい。

また本研究の研究対象は、台湾 10 ペア、日本 9 ペアとデータ数が限られており、今後データを充実させていく必要がある。さらに、どんな初対面会話を経て、その後どのような交流に繋がるかという質的な側面と、その初対面会話に関するそれぞれの満足度などの量的な側面から、探究すべきであると考ええる。

註

- 1 独立行政法人日本学生支援機構の「留学生の受け入れ概況（平成 17 年版）」による統計情報である。（2006/08/28 検索）http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data05.html
- 2 本研究では終結部について検討しない理由は後述する。
- 3 この論文から引用した用語はすべて筆者訳である。
- 4 自己開示の定義について奥山（2000）には特に説明がなかったが、ジュラートによると、自己開示は「個人的な情報を他者に知らせる行為」（榎本,1997）だという。
- 5 しかし、協力者数の関係で、やむを得ず台湾と日本それぞれ一つのペアは一年生対三年生となった。しかし、データを見ると、特に上下関係の影響は見られなかったため、このデータも分析に加えることとした。
- 6 文字おこしに用いる記号と説明

記号	意味
[角括弧：参与者たちの言葉の重なりになっていることを示す。重なった発話の始まりの個所のみに示した。
#	シャープ：聞き取り不可能のことを示す。
(数字)	丸括弧でくくられた数字：その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、ごく短い間合いは「()」という記号で示される
(仮名)	丸括弧でくくられた仮名：相づち、動作の説明を示す。
:	コロンの列：直前の音が伸ばされていることを示す。
?	疑問符：語尾の音が上がっていることを示す。
。	句点：語尾の音が下がって区切りが付いたことを示す。
,	読点：参与者の発話の区切りがある部分を示す。
(↑)	上向き矢印：音調が極端に上がっていることを示す。
(↓)	下向き矢印：音調が極端に下がっていることを示す。
H	H の列：「HHH」は主に笑いを示し、「H」は呼吸音を意味する。
—	下線：当該個所の音が非常に大きいことを示す。
°°	上付きの丸：これで囲まれた個所の音は小さいことを示す。
[]	すみ付き括弧：実際情報を伏せ、代用の言葉で示す

7 T02L1 とは、T は台湾で、02 はグループ 2 を表し、L1 は一年生の L さんを指す。

8 日本のペア一組（J01）から、寮にて同じフロアに住み面識があるが、会話はしたことがないという事実が録音開始直前に明かされた。面識があったことが影響したためか、このペアは寮生同士のカテゴリという前提で会話を展開していった。従って、当該データは本研究の研究目的とずれがあると判断したため、分析対象から外した。

参考文献

- 岩田夏穂 (2004) 『日本語非母語話者が参加する相互行為の対称性及び非対称性について－イニシアチブ・レスポンス分析の試み－』 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 修士論文 (未公刊)
- 榎本博明 (1997) 『自己開示の心理学的研究』 北大路書房
- 奥山洋子 (2000) 「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話－質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に－」 『日本学報』 45 輯, 117-132, 韓国日本学会
- 小川一美 (2000) 「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係」 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)』 47 巻, 173-183
- 奥津敬一郎・沼田善子 (1985) 「日・朝・中・英のあいさつ言葉」 『日本語学』 4 巻, 8 月号, 53-69, 明治書院
- 謝韞 (2005) 「日本人女子大学生同士と中国人女子大学生同士の初対面会話」 『日本中国語学会第 55 回全国大会 予稿集』 296-300
- 陳明涓 (2002) 「フレームに見られる文化的差異－台日大学生によるグループ討論の場合－」 『人間文化研究年報』 26 号, 39-46
- 陳明涓 (2006) 『日本語による台日接触場面のフレーム分析－大学生のグループ討論をデータとして』 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 博士論文 (未公刊)
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』 講談社
- バーンランド, D. C. (1979) 『新版 日本人の表現構造－公的自己と私的自己・アメリカ人との比較』 西山千・佐野雅子訳 サイマル出版会 (Barnlund, D. C. (1975) *Public and Private Self in Japan and the United States*)
- 彭泗清・楊中芳 (2001) 「第七章 交往關係的影響因素與發展過程」 『中國人的人際關係情感與信任』 楊中芳主編 181-195, 遠流出版社
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー－大学生会話の分析」 『日本語教育』 103 号 49-58
- 楊中芳主編 (2001) 『中國人的人際關係情感與信任』 遠流出版社：台北市
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」 『異文化間教育』 第 5 号, 81-97
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰 (1999) 『会話分析への招待』 世界思想社
- Berg, J. H. & Clark, M. S. (1986) Difference in Social Exchange Between Intimate and Other Relationships: Gradually Evolving or Quickly Apparent? *Friendship and social interaction* V.J. Derlega & B.A. Winstead (eds.) 101-128, Springer Verlag: New York
- Maynard, D. W. & Zimmerman, D. H. (1984) Topical Talk, Ritual and the Social Organization of Relationships *Social Psychology Quarterly* vol. 47, 4, 301-316
- Tannen, D. (1993) *Framing in Discourse*. Oxford University Press: New York
- Watanabe, S. (1993) Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. *Framing in Discourse* Tannen, Deborah (ed.) 176-209, Oxford University Press: New York

(2007 年 1 月 12 日受理)